

「ALPS」100号のあゆみ ～直近3人の編集担当者による座談会～

100's Anniversary

平成2年、当協会設立と同時に創刊された情報誌「ALPS」は、
今号をもって100号を迎えることになりました。
そこで、今回は編集サイドの舞台裏をご紹介します。
直近3人の編集担当者による座談会をお届けします。



竹内：今日はご多忙の折り、お越しく
ださいましてありがとうございます。「A
LPS」一〇〇号を記念しまして、編
集における苦労や工夫、そして二〇〇
号、三〇〇号を目指してより良き「A
LPS」のためにご経験に基づいたア
ドバイスも頂戴できればと思います。さ
で、常に悩まされることですが、どの
ようにして執筆者を探していましたか。

執筆者探し

Writer

氏家：伝手と言いますが、とにかく知
り合いにお願いする、講演を聴いて良
かった人をお願いする、本を読んでそ
の著者をお願いする、こんな風にして
探していました。インターネットでの検
索は、あまり利用しませんでした。

竹内：確かに氏家さんの担当の頃は、
今ほどはインターネットでの情報量が
なかったですから。今はその点、氏家
さんが行っていた方法に加えてインタ
ーネットも利用できますから、便利で
す。ただ逆に情報過多と言いますか、
候補者が多くてその取捨選択にパワー
をかけることもテーマによっては出てき
ています。

前村：他の雑誌などと似たような記事
になる危険性を感じませんでしたか。

竹内：常に感じています。特に、同一

テーマで他の雑誌と同一内容となるのは避けたいのですが、「ALPS」の読者が、その他の雑誌を読んでいるとは限らないという点が、さらに判断を難しくします。

氏家…確かに人によつては初めての記事ですけど、別の人にとってはどこかで見たなあ、となりますからね。

前村…しかし、繰り返し、繰り返し訴えていくべきこともライフプランでは多いですから、例えは悪いですが、手を替え、品を替えてでしょうか。

インタビュー

Interview

竹内…氏家さんが担当の頃からインタビューを積極的に取り入れたという印象があるのですが、これも手を替え、品を替えるということですか。

氏家…当時、「ALPS」は今よりはるかに知名度が低かったですし、実際自治体に配付をしても何人が読んでくださっているか、全く分かりませんでした。せっかくライフプランの啓蒙のために良い記事を入れましても、読んでももらえない、目を通してもらえない、これは何としても避けたかったです。「ALPS」の花になるように、すなわち、有名人のインタビューを入れることで、少なくとも配付先には目を通してもら

えると思っていて、精力的にインタビューを入れていきました。

竹内…圧巻は五連続ですね。六〇号（二〇〇三年一〇月）の東ちづるさんに始まって、西川りゅうじんさん、杉浦正則さん、三屋裕子さん、六四号の森末慎二さんと有名人を並べましたね。

氏家…そうです。花のように、次は誰、次は誰、という風に楽しかったんです。でも、正直なところ有名人に会ってみるのは、自分の楽しみでもありました。長谷川理恵さんだけ自分の時は実現しませんでした。

竹内…そうですね。それが氏家さんの遺言のように残っていましたから、私が引き継いですぐに、七五号（二〇〇六年四月）で長谷川さんのインタビューを入れしました。そして七七号（二〇〇六年八月）の白井のり子さんのインタビューからは、インタビューアームも協会職員が行うように変更しました。

前村…インタビューの人選はどのようにされていましたか。



竹内…誤解を恐れずに言えば、自分が会ってみたい人です。当然、ライフプランに関係することで聞きたいことがあり、その中で会ってみたい人です。

氏家…私も全く同じです。読者がついて来やすい人。例えば、浅田真央さんとかでしょうか。

竹内…私の考えは少し違ってまして、第一線でやってきて引退した人。同じフィギュアスケートの分野ならば中野友加里さんということになるんでしょうか。人生を見直した時期が絶対あったはずですから。お話を聞いてみたい人という軸はもちろん重要です。

前村…私もそうです。私の場合、九三号（二〇〇九年四月）の小泉武夫さんは、まさにそうであり、食べ物に関してお聞きしたいことを十分聞けたと思います。

竹内…氏家さん、前村さんは銀行からの出向。私はプロパーですが、協会で行っている業務はすべて未経験のものばかりでした。我々、素人集団が





氏家卓 (うしいえ・たかし)

1967年生まれ。石川県出身。平成16年5月から平成17年7月の間、金融機関(銀行)より派遣され、協会に勤務。主な業務は「ALPS」編集、その他冊子類の作成、ライフプランセミナー講師として活躍した。現在は派遣元の銀行で、個人向け業務に従事。



前村浩一 (まえむら・こういち)

1966年生まれ。鹿児島県出身。大学では漫画研究会に所属。平成19年4月から平成22年3月の間、金融機関(銀行)より派遣され、協会に勤務。主な業務は「ALPS」編集、その他冊子類の作成、ライフプランセミナー講師として活躍した。現在は派遣元の銀行で、個人向け業務に従事。

良いものを作るには、やはり担当者の思い入れ次第と私は思います。その点では、例えば、九一号(二〇〇八年二月)の前田知恵さんのインタビューは、九〇分くらい色々なお話をし、その中からライフプランに役立つキーワードをうまく引き出せたと思います。テープ起こし(発言をそのまま文字にすること。インタビュー原稿を作る際の第一段階)では、四万字を超え、既定の八〇〇〇字程度に抑えるために、泣く泣く削った箇所がありました。

前村…インタビューを入れることで、「ALPS」に親近感を持ってもらえればという思いは、お二人と一緒です。

竹内さんはインタビューのやり方は、やはり今言われたようなやり方を初めてからされていたか。

竹内…いや、それが全く違うんです。初めの頃はむしろ私が言いたいことを有名人の口を借りて言ってもらうように進めていました。しかし、誘導尋問みたいなインタビューだと通信員から指摘を受けたことがあります。猛反省して今の姿に定着しました。その過程で、自然な普通の会話を意識して行うことの難しさを知った次第です。

ところで、読者から大変評判の良いものの一つに表紙の絵があります。今のシリーズは、各都道府県を順繰りに名所旧跡などを絵にしてもらっているのですが、氏家さんの時に開始されていますよね。

表紙

氏家…はい。五八号(二〇〇三年六月)

Cover



から今のスタイルにしました。四七都道府県すべてに配付されているわけですから、これも「ALPS」を手にとって親近感を持ってもらうために行った改善です。誰でも自分の故郷や現在の居住地の絵が出ていれば嬉しく思うはずです。

竹内…このシリーズもそろそろ四七都道府県を一巡します。次は政令市か、海外の首都か、その他の候補も含めて何にするか決めていく必要が早晩出て来ます。ただ、今のイラストレーターの西谷さんの絵は今後も使い続けたいですね。

前村…温かみがある絵です。今回も、あるいは以前にも誌面に自分でイラストを描いて載せましたが、足元にも及びません。

氏家…当たり前(一同笑)。プロとアマの違いですよ。

装丁

Binding

竹内…前村さんの腕が上があれば表紙の絵をお願いしようかな。でも今は銀行員として多忙でしょうから、表紙が白い「ALPS」になっても困りますし。

改善といえば、六八号(二〇〇五年二月)までは平綴じ、六九号(二〇〇五年四月)からはあじろ綴じで現在に

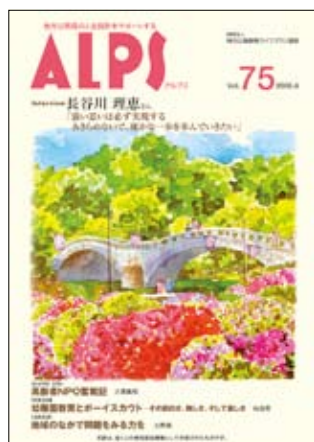


竹内 敦 (たけうち・あつし)

1959年生まれ。京都府出身。平成17年4月採用の協会プロパー職員。現在に至る。「ALPS」の編集は担当として、平成17年4月から平成20年3月まで行い、その後は前村氏による編集をスーパーバイスした。前職は製造業の営業、購買、企画などを経験している。

至っています。これも氏家さんの時の変更ですが、何か理由はありますか。氏家…この頃から「ALPS」が充実し、ページ数が増えて来ました。平綴じでは限界に来ており、あじろ綴じに変更したのです。

竹内…確かに七〇号(二〇〇五年六月)辺りからは、コンスタントに五〇ページ以上、七四号(二〇〇六年二月)からは六〇ページ以上となりました。そういう意味では氏家さんが改善の基礎を固めてくれた後に、担当させてもらい幸運でした…ということに今気づきました。



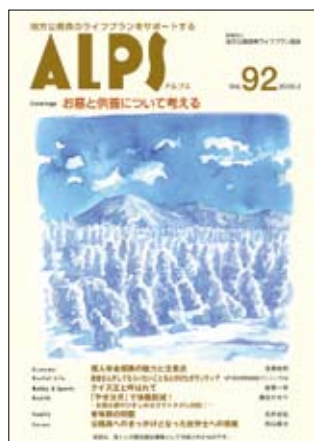
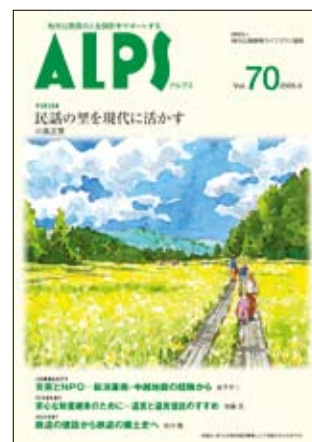
氏家…遅い！(笑)。その後、内容の改善は竹内さんをお願いした形になりましたね。協会OBには「ALPS」は毎号送られてくるのですが、元編集者として私は、編集後記を一番初めに読むようにしています。

竹内・前村…ありがとうございます。

記事のテーマ

Theme

竹内…改善という意味では、私は試行錯誤の連続でした。一番うまく行ったのは、年間テーマに継続性を持たせたことです。すなわち、各テーマで何を



伝えていきたいかを明確にしました。

例えば、七五号からのHealthのコーナーでは、日本人の三大死因、がん、心疾患、脳血管疾患をそれぞれ二連載、かつ各分野の第一線の医師の方に執筆依頼をかけ、その原因、予防法について、高度な医学知識を前提としない一般向けの分かりやすい原稿が六回続いた時は、ピタッとハマったという達成感がありました。

また、全般的にイラスト、表を多めに用い読みやすくするように心がけまして、それらは現在にも十分引き継がれていると思います。前村さんの改善と言えは、やはり通信員の活用ですね。

通信員とアンケート

Monitor

前村…お墓の取材記事「お墓と供養について考える」(九二号、二〇〇九年二月)のように、通信員を対象に「特別アンケート」を行い、その結果を紹介

介する手法をもっと活用してほしいと思います。

竹内…氏家さんの頃は、まだ通信員の制度がなかったのですが、平成一八年度、七五号から一〇〇名程度の方に読者モニターとなつてもらい、各記事の評価や今後希望する記事をお聞きしています。当時は、「ALPS」の知名度も低く、自治体に職場推薦の形で通信員になつていただいた方のほうが多いくらいでしたが、今年度からは全員公募で、かつ一部の方々には抽選でご遠慮いただくくらいの人数まで集まるようになりました。

氏家…読者との双方向のコミュニケーションという意味で、すぐ役に立つのではありませんか。

竹内…皆さんに盛り上げていただいている、という気持ちを強く持ちます。記事の評価のみならず、色々いただく意見が特に編集者にとって参考になります。実際、希望記事としてご意見をもらったテーマについて、該当する記事を極力入れていくようにしていました。記事の評価も面白いものでして、編集者の評価と通信員の評価は必ずしも一致しません。「なぜだろう」と考えるきっかけにもなります。前村さんはどう感じていましたか。

前村…通信員アンケートでの評価を見ますと、執筆者の知名度はあまり関係

なく、「目から鱗が落ちる」知識・考え方を提供するような記事が高い評価を受けています。但し、これを追求し過ぎますと安易な「ハウツーもの」になつてしまう危険性もあります。感動、共感を呼ぶような内容の記事を適宜織り交ぜていく必要があります。今後も、現行とあまり変化させないのがよろしいかと思っています。

氏家さんは、今一旦離れた立場での読者になられているわけです。過去も振り返り、今後の「ALPS」に重要だと思われるものはありますか。

今後の「ALPS」 Future

氏家…私が担当するよりさらに前の「ALPS」を見たことがあります。ライフプラン情報を提供するというよりも、むしろ協会の活動報告誌というようなイメージがありました。

竹内…確かに発足当時（平成二年）の「ALPS」を見ますと、B5版平綴じでページ数も少なく、ライフプラン情報は今より少なかったですね。今の「ALPS」があるのは先輩諸氏の改善の積み重ねだと思っています。

前村…「ALPS」の在り方ですが、何事も対外的に「説明責任」が求められる時代です。「ALPS」において



も「なぜその記事を載せなければならぬのか?」「その記事は発行趣旨に鑑みて妥当と言えるのか?」という「突っ込み」が今後予想されます。

これまでも、年間企画策定の段階でコーナーごとの意義を確認しながらやってきているわけですが、いま求められている情報とは何かをより強く意識し、企画がマンネリ化しないようにする努力が必要になると思います。

竹内…おっしゃる通りですが、この部分はジレンマに陥る可能性を秘めています。「説明責任」が求められることを意識し過ぎて原稿を入れた場合、無難な方向へと間違いなく向かいます。知識だけの「ALPS」、どこかで見た記事ばかりの「ALPS」にはしたくないと思っています。人の考え方、感じ方、加えて異論もあるようなものも不可欠です。

例えば、九四号（二〇〇九年六月）での取材記事「結婚とは」において、アラフォー女性の座談会を入れました。



通信員の方からは賛否両論があり、「無駄なおしゃべりを聞かされているようで、記事の意図がわからない」とのご意見は貴重でした。その一方、「目的やスタイルが多様化した結婚に対して、興味深く拝見しました」「自分に照らし合わせて考えました」というご意見もありました。当該の記事は結論を作らず、考えるきっかけにしようという意図を入れての記事です。この場合、「結婚こうあるべき論」ではない、結論をあえて作らない記事であることを如何に理解してもらうか、これからの課題だと思っています。テーマ的にはいかがですか。

前村…ライフプランの要素（生きがい、家庭経済設計、健康づくり）において、今後重点を置くべきテーマを考えますと、健康づくりの分野では「メンタルヘルス」が挙げられます。ここ数年来重点化が進んでいるともいえますが、一つのコーナーとして独立させても良いくらいです。

次に家庭経済設計の分野では、多様化した世帯構造・ライフスタイルに合わせたライフプランの提示が挙げられます。今まで手薄だった「女性」「中年以降シングル世帯」「母子・父子世帯」「晩婚・高齢出産世帯」などのカテゴリについて、事例とキャッシュフロー表を提示する必要があると思われます。

生きがいにおける家族の分野では、家族形態の多様化が進む情勢の下、家族それぞれが幸せになる関係をどのように構築していくかを読者に考えさせる企画が挙げられます。

「ALPS」は地方公務員のライフプランをサポートする情報誌です。ライフプランを考える意義は、その人あるいはその家族の「幸せ」のためです。「どういう人生設計をすれば自分は、家族は幸せになれるのか」を考えてもらうきっかけを与える、あるいはヒントを与えることが本誌の根本的な使命と言えるでしょう。この使命を見失わなければ、「ALPS」はますます発展し続けることができると思います。

氏家…退職前教育的なライフプランの在り方は、すでに一定の評価を得てきたはずですが、また、定年退職者数のピークは過ぎました。見た目をかなり追及してきた私として、これから大事なものは、むしろ内容だと感じています。それも若い人、二〇歳代、三〇歳代に

もつともつと焦点を当てて新鮮味を出していくことが必要です。大きなテーマを二〇歳代、三〇歳代向けに振っていくことが重要です。

竹内…ライフプランセミナーのアンケートを見ますと、五〇歳代後半の方々数名からほぼ必ず出てくる言葉「もつと若い時に、この話を聞いておけば良かった」というのがあります。しかし、そのセミナーが、四〇歳代、場合によっては三〇歳代を対象に開催されていなかったかと言いますと、ちゃんと開催しているんです。すなわち、ライフプランの重要性に気づいてもらうことを「ALPS」を通じて今後も行っていきたいと思っています。

将来に対する不透明感が増した現在において、気づきを得てもらいたい世代は、社会人一年生から、と申し上げても過言ではないでしょう。また、この四月からは編集担当者が女性となり、かつ若々しい考えでやってくれると思っています。氏家さん、前村さんが言われたことも実現するためでもあります。

今日は、色々貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございます。また、読者の皆さま、今後ともよろしく願います。

（作成…協会職員 竹内敦）